【回想記】

激動中国に青春を生きる
―留用と学校で学んだ人生観―

国谷 哲資

1. 敗戦まで

1932（昭和 7）年 4 月 14 日、父・国谷重隆と母・春代の長男として生まれる。出生地は鳥取県西伯郡御来屋町 943 番地。

父は胸を病んで兵隊検査では乙種合格となり、町内の銀行に勤めていたが、柳条湖事件で日本の満州（現・中国東北部）侵略開始後、関東軍の軍属に応募して渡満した。母はまだ生後 100 日ばかりの私を抱いて夫のあとを追ったが、当時の奉天（現・瀋陽）近くで抗日部隊の襲撃にあい、間一髪で難を逃れて、大連にいた兄の嫁のところに一時身を寄せたようだ。他方、父は胸の病が再発して旅順の陸軍病院で治療することになった。乳飲み子を一緒においておくことができないとなり、やむなく母は私を連れて帰国、祖母に育児を託すことになる。

1937（昭和 12）年 12 月、満 5 歳となり就学年齢に近づいたこと、また父も健康を回復し、軍属を辞めて「満州国」の経済省建築局に勤めるようになったために、私を日本から新京市（現・長春）に迎え、親子 3 人の生活が始まった。ちょうど日本軍国主義が中国全面侵略を開始した年で、「南京陥落」の提灯行列にわいていた頃だ。

1939（昭和 14）年 4 月、新京市の日本人小学校である順天尋常高等小学校一年に入学。皇国史観にもとづく「少国民」教育を受ける。翌昭和 15 年は「紀元 2600 年」の一大イベント。神武天皇以来、万世一系の天皇を頭にいただく大日本帝国だと「国威発揚」の大宣伝がくり広げられた。「神国日本は不滅だ」、「八紘一宇」で世界を統治するのだ、「満蒙は日本の生命線」だ、「聖戦完遂」だなどと、教科書だけでなく音楽や体育、軍隊を真似た行軍や一日入隊などで叩き込まれた。とくに昭和 16 年 12 月の太平洋戦争開戦からは軍国教育に段階を画した。歴代天皇の名前の暗唱、教育勅語の暗唱に始まり、天皇の「赤子」として陛下のために死ぬことは「男子の本懐」と思わせるため、真珠湾攻撃の七軍神、アッツ島玉砕、山本五十六元帥の殉死などをとりあげて、「米英撃滅」で仇を討つのだと煽られた。近所に仲の良い 3 人の同級生がいたが、その集団作品が 4 年生のときは「月面図」であったのが、敗戦直前、私の卒業直前でもある 6 年生のときは「硫黄島の攻防戦図」となった。

1945（昭和 20）年 4 月、新京第二中学校に入学。わずか一学期で敗戦となった。毎日の軍事教練では配属将校に叩かれながら木銃で突撃練習をやらされたこと、生徒間の話題がどこのだれが幼年学校に受かったとか、予科練にいったとかであったが、すでに敗色が濃くなっていたせいか、生徒間でそれをうらやむとかはなくなり、悲壮感が漂うようになっていたように思われる。

２．安東への避難

夏休みのさなか、8 月 9 日早朝に航空機の爆音が轟き、ソ連が参戦したことを知る。翌 10 日には、我が家・官舎の隣に住んでいた関東軍少将が家財をトラックに積めるだけ積んで逃げ出した。あとで知ったことだが、関東軍が皇帝を連れて最後の抵抗陣地を築いていた長白山麓の通化方面に向けて遁走したのだとか、いや一目散に日本本土に逃げ帰ったとかだった。そのころ、わが官舎一帯に軍の 1 個班ぐらいが配置された。そのうち小銃を持ったものが 1 人、あとは銃剣だけであったことに、さすが子どもでも「もう負けたな」と思わざるをえなかった。それらの軍隊から、われわれ住民はタンスや机の引き出しを全部出すよう命令された。同時に、市内幹線道路にはソ連戦車を阻止するための壕が掘られた。そしてソ連戦車が侵攻してくれば、女も子どもも引き出しに爆薬を詰め、それを抱いて壕に飛びこみ、戦車もろとも爆死するというもくろみであったようだ。当時、青壮年男子はほぼ徴兵されていたから、残っていたのは婦女子ばかり。彼女らが官舎の玄関先で「子どもは殺せない」と肩を寄せ合って一日中号泣していた姿が今でもまぶたに浮かぶ。これこそまぎれもない軍国主義政府の棄民政策であった。

同 13 日、経済省から疎開命令が出て家族全員が本省に集結させられた。同省中庭では文書の焼却がされていた。そこで全員に青酸カリ一袋が手渡され、今夕疎開列車で南下するが四平街あたりでソ連軍と遭遇するかも知れない、そのときは全員これで自害するよう言い渡された。さいわいソ連軍とは出会わなかったが、無蓋車に乗せられたわれわれ避難民は 3 日 2 晩雨に見舞われ、ずぶぬれの逃避行となった。肺病を病んでいた父は呼吸困難を起こして苦しんだが、薬もなければ医者もいなくどうすることもできなかった。15 日の午前 11 時過ぎに列車が朝鮮との国境の町、安東（現・丹東）駅に着くと、憲兵がプラットホームで「畏れ多くも正午に玉音放送がある。疎開列車はここで止まるから静聴するように」と告げた。

３．安東での生活と被服廠への就労

わが一家は父の容態悪化で放送を聞く間もなく、駅から満鉄病院に直行し応急処置を受け、父は即刻入院となった。それから数カ月間、住む家もなかったので、母と病棟の付添婦部屋で生活した。同年 12 月 12 日に父は他界した。享年 44 歳であった。私たち母子は、その直前に安いアパートの一室を借りることができたが、生活の保証は皆無だった。古くから安東に在住していた日本人は売り食いもできたが、わが家は売るものはなく、収入もない。母は隣の住人の紹介で戦後山東省から進駐してきた「八路軍」（中国共産党の軍隊）がつくった被服廠のアイロン工として働くようになった。私はもう学校もないので何か仕事をしなければと思ったが、まだ 13 歳ではまともな仕事につけない。当時、疎開者の子どもや母親がやっていた大福やおこしの行商をしばらくやった。たすきがけの箱に売りものを入れて町を歩くのだが、なかなか売り声が上げられなかった。毎日母と売れ残りの品物をアパートの住人に買ってもらったり、差し上げたりしたことを苦い思い出として覚えている。そのうち母が八路軍の工場長に子どもがいると訴えたらしく、「連れてこい」となった。1946 年 2 月ごろ、私も被服廠の掃除をさせてもらうようになった。

八路軍は当時「東北民主聯軍」と名乗っており、被服廠の正式名称は「東北民主聯軍遼東軍区

後勤部被服廠」であった。同廠はかつての太陽ゴム靴工場を接収したもので、民主聯軍の夏冬の軍服や外套、軍帽、弾袋などを生産していた。縫工のほかに布の裁断、仕上げのアイロン、梱包、ミシン修理部とあって、工員数は約 200 人、うち半数近くを日本人が占めていた。動力ミシン 24 台を 3 馬力のモーターで引っ張るラインが 4 列くらいあり、1 台のミシンに 2 本のベルトがかかっていた。そのうち 1 本はミシン本体と速度を変えるトランスにかかり、もう 1 本はモーターで回転するプーリー（車輪）にかけられていた。そのベルトが回転中に外れるたびにモーターを止めるわけにいかないので、テーブルの下に潜って回転するプーリーにベルトをかける必要があった。テーブルの下に潜るのは小柄な子供が最適なので、掃除以外はベルト掛けの仕事をした。やがて、ミシン修理部にいた日本人の職人が、これから生きていくのに手に職をつけておかなければならないと、ミシンの修理を初歩から教えてくれるようになった。

敗戦前の安東は 3 万人近くの日本人が暮らす大きな町で[1]、鴨緑江を挟んで朝鮮との国境にあった。日露戦争後、わりと早くから日本人が移り住み、満州時代に満州自動車や満州軽金属など日本企業が設立され、社宅が建ち並んだ。そのうえ、北から朝鮮経由で帰国しようとした軍人家族や官吏家族などが敗戦で足止めされ、日本人が急増した。敗戦で行政･公共機関や学校は閉鎖されたが、市の有力者などでつくる「治安維持委員会」や日本人会が治安維持につとめたからか、大きな騒乱状態は耳にしなかった。

1945 年 9 月初めにソ連軍が進駐、一部で強盗･強姦事件もあったと聞いたが、私が満鉄病院の外来で目にするソ連兵は、笑顔で花束を看護師に届けるなど、概して明るい感じの若者だった。それでも、腕時計を三つも四つもつけた兵士も散見された。北部国境から南下する過程での数々の蛮行へのごうごうたる非難が起こり、憲兵のとりしまりが強まったとも聞いていた。

1945 年 10 月に入ると､山東省方面から日本軍とたたかった八路軍（後に東北民主聯軍と改称）が安東入りした。この軍隊は、木綿の服に粗末な兵器をだらりと下げた兵士たちだったが、大通りを清掃する、借りた物は必ず返す、日本人とか中国人とかの差別はしないなど、きびしい軍紀に市民は好感を持っていた。やがて民主聯軍が市政権を握り安東市人民政府もできたが、その過程では反共の旧勢力や旧日本軍が結んで民主聯軍を包囲せん滅する策動もあったと聞いた。翌 46 年の初めごろ、安東市公安局の幹部が白昼路上で国民党（総裁・蒋介石）の特務に暗殺される事件が起きた。国民党と日本軍の残党が結託していた関係からか、一時期市内の日本人は一見して日本人と分かる服装をするよう達しが出た。こうした反共の反乱事件は同時期に満州各地で起こっており、その代表的なものが関東軍の残党と国民党特務が結託して起こした通化暴動事件であったと聞いた。また、そうした事件のバックには、日本の敗戦を認めず復讐をはかる石原莞爾（元関東軍参謀）が率いる東亜連盟があるとの噂が広がっていた。

こうしたなかでも、被服廠では工場長をはじめ八路軍メンバーは日本人労働者に対して、「中国を侵略したのは日本の天皇や軍閥、財閥であり、あなたたちもわれわれと同じ戦争の犠牲者だ」との考えを明らかにし、一緒に働く中国人労働者も同様の観点で教育した。被服廠には 1946 年夏頃に鳳城被服廠も合流して 100 人を超える日本人となったが、中国人労働者による日本人への差別事件や衝突事件が起きたことはなかった。

今にして思えば、1946 年 10 月は、私の人生の大方向を決める転換点となった。当時、日本投降後の中国をどんな国にするかをめぐって共産党と国民党のあいだで鋭い対立があった。共産党が革命を前に進めて働くものが主人公となる社会をつくろうとしたのにたいして、国民党はアメリカの後押しを受けて武力でそれを阻止しようとした。この年の 6 月には、アメリカ式に武装された国民党軍が停戦協定を破って、共産党との本格的な内戦を開始した。国民党軍の精鋭部隊が大挙して東北部（旧満州）に侵入し、一隊は瀋陽（旧奉天）を落として北上し長春（旧新京）に迫ると同時に、もう一隊は瀋陽から南下し、わが工場のあった安東に向かってきた。それとほぼ時を同じくして、旧満州在留日本人約 100 万人の日本への引き揚げが始まった。その港となった葫蘆（コロ）島はすでに国民党軍支配下にあり、安東地域の日本人は民主聯軍支配地域から国民党軍支配地域に移動するため、内戦の影響を受けざるをえなかった。このため安東地区のわりと裕福な市民は、海路南朝鮮の仁川に渡り、米軍管理下の鉄道を使って釜山経由で帰国したと聞いた。

４．安東から銅山へ

そんななか、民主聯軍は戦略的撤退方針をとり、国民党軍が安東に迫った。このため被服廠の軍指導部は、われわれは安東を暫時放棄して戦略的撤退をする、日本人労働者は「帰国されてもいいし、われわれ工場とともに撤退されてもよい」という個人の意志を尊重する方針を示した。当時 100 人ほどいた日本人工員の 9 割近くが工場とともに撤退する道を選んだ。異国の地で帰国を一日千秋の思いで待っていたはずの人たち、老人や婦女子も少なくない人たち、しかもこの先どんな運命が待ち受けているか皆目見当もつかないというなかで、共産党の軍隊について行くと決めたのである。共産党の理念がどうかという理屈ではなく、八路軍の人たちが民族の別なく人間を平等に扱い、自発的意志をとことん尊重したからであろう。私の母もなんのためらいもなく八路軍と一緒に撤退することを決めた。どうしてそうしたか。のちに母が述懐していたところでは、「八路軍は信頼できる良い人達だ、敗戦で混乱した日本に急いで帰るよりも、この部隊と一緒ならば子どももまっとうな人間に育つと考えた」といっていた。

国民党軍が安東に迫った 1946 年 10 月 23 日早朝、八路軍に従って撤退を選んだ日本人労働者と家族約 80 人余りは鴨緑江港岸のジャンク（中国式木造帆船）数隻に分乗し、護衛部隊に守られて安東を離れ、一路鴨緑江を北上した。約 1 週間の険しい船旅をへて水豊ダム下に着いた。別便で運んできたミシンなど工場の機械類は対岸の朝鮮に避難させるため、若い屈強な男衆 20 人くらいがその運搬のため朝鮮側に移った。残った年寄りや婦女子は一泊したのち歩いて山を越し、ダム湖に横付けされたジャンクに乗り込み上流に向かった。5 日ほど帆走してとある入り江に船を着け、短期間の休息をとった。そこでは砲声がかすかに聞こえ、戦場が近いことを実感させた。ある日、日本人の安全のためなのか対岸の朝鮮漁村に避難、2 泊ぐらいした。そのとき、朝鮮の国境警備兵が船をのぞき、「36 年間の植民地支配を忘れないぞ」と露骨にいわれた。当然のことではあるが、安東時代には聞かれなかった言葉であったので日本人のなかでは「中国とは違い、ちょっと怖いね」という人もいた。

ダム湖の航行が終わるころは 11 月も下旬、川は浅くなり一部氷結もするようになったので、炭鉱のあった大栗子まで約 1 週間、毎日 60 華里（約 30 キロ）を行軍した。この行軍には十数人の民主聯軍兵士が護衛についてくれ、紅軍以来の軍紀「三大規律･八項注意」を実際に見ることができた。毎日どこかで民宿するのだが、兵士らは翌朝世話になった民家の庭の掃除をし、水くみをして水甕を満タンにする、かまどの薪割りをすることがならわしだった。これまで軍隊といえば日本軍か満州国軍しか見てこなかった地元の農漁民には驚きであったようだ。私たち日本人も見よう見まねで掃除などを手伝ったりしたが、昨日まで威張りくさっていた日本人がと、少し不思議であったようだ。それらは次第に民主聯軍への信頼、親密度を深めることになったといえよう。ある日、炊事担当の兵士が前日民宿した農家から借りた釜を返し忘れていたことが分かった。責任者の班長は「借りた物は必ず返すべし」と叱責、すでにその村に敵軍が入っているかも知れないなかで、護衛兵を数人つけて釜の返却に行かせた。無事帰隊したのでほっとしたものだった。

12 月初旬、大栗子で行軍を終え、無蓋車で臨江に着いた。当時、臨江は民主聯軍の戦略拠点で各種部隊が集結していた。私たちは旧東辺道開発がつくった被服工場に合流した。そこにはすでに本溪方面から来た日本人労働者、昨日までは女学生で民主聯軍に留用されたと思われる娘さんら 30 人余りが来ていた。電力は絶たれていたのでミシンは足踏み機、裁断は手鋏み、松根油を明かりにして昼夜二交代で夏服を生産していた。この年も押し詰まったころ、水豊ダム以来機械の輸送任務で朝鮮に渡っていた男子労働者も臨江に帰り合流した。1947 年の正月は作業を休み、お酒も出てささやかに祝った。安東と本溪の日本人を引率してきた 2 人の民族幹事（日本人民主連盟に所属）が中心となり、当面する情勢を討議する学習会も開かれた。

内戦の戦局の方はまだ国民党軍が優勢で、臨江に空軍機がよく飛来するなど、通化から臨江に接近してきた。このため安東被服廠から来た私たち日本人の一団は、同年 2 月ごろ氷結した鴨緑江の岸辺を手製のソリに荷物を積み、ソリを押しながら上流に向かって行軍した。雪が踏み固まって氷のようになった道は足に力が入れられず、かなりきつかった。5 日間ほど民宿しながら行軍して、六道溝という町に着いたのち、そこから山奥にある銅山に向かった。

この銅鉱山も恐らく旧東辺道開発が開いたもので、敗戦で日本人技術者は逃亡し、廃墟となっていた。5 棟ばかりの長屋を自力で修繕し、オンドルもつけて快適な住居にした。風呂はドラム缶を使い、廃棄されたパイプを集めて山の泉から水道を引いた。炊事担当の中国兵士に大変喜ばれた。食事は 1 日 2 回でコウリャンやトウモロコシが主食、野菜は白菜に大根が多かったが、春の山に登ればウド、山ゴボウ、ツクシなど食材は豊富にあり、食事に野草が色を添えた。ここではミシンもなく被服の生産はできなかったので、午前中は読書や時事学習、昼からは裏山に登って主に白樺などの木材を伐採した。その木材を何回か六道溝に運び、その売り上げで自活するというもので、自力更生は結構楽しいものだった。だが同時に、長く胸を患っておられた女性が 1 人亡くなり、山から降ろした薪を積み上げて荼毘に付すという悲しいこともあった[2]。

５．輯安時代

1947 年 4 月、東北民主聯軍は東北地方全体で反撃局面に入った。それにともない、銅山に避難

していた私たちも被服廠本来の任務に戻るため、銅山に別れを告げて鴨緑江中央部の街・輯安（現・集安）に移動することになった。5 月のメーデーを祝うとすぐ先遣隊派遣となり、15 歳となった私もその 1 人に選ばれた。輯安までの道程はかなり険しかった。まずは朝鮮側に渡ってトラックで移動したのち、つぎは鴨緑江を船で中国側に渡り、そこから徒歩で臨江の被服工場にたどりつき、1 泊して船で鴨緑江をくだった。この時期はまだ水量が少なく船はしばしば座礁する状況で、一度は船が難破して、私が抱いていた親父の遺骨箱が他の人達の荷物と一緒に流された。「父さんは一足先に日本に帰ったな」と、仲間が手を合わせてくれた。

被服工場再建の場所は輯安西方の山の中腹にあった旧農業学校で、屋根は残っていたが、窓も床もない荒れ果てた建物だった。鴨緑江岸につながれていた材木を製材して、まずは宿舎の床張り、窓着け、壁張りをやって住処を確保し、ついで工場の板ばりなどをして、電力を引いて動力ミシンを据え付け、裁断機も使えるようにした。やがて臨江の被服廠の日本人労働者も合流して、日本人だけで総勢 100 人近くになり、地元の中国人労働者を若干募集して 150 人ほどの工場になった。朝鮮に避難していたミシンなどの機械類も対岸の町・中江鎮から輯安に移して工場を再開した。工場では「民主聯軍の大反撃支援」のメーンスローガンのもと綿入れの軍服、外套をはじめ肩にかける弾袋、手榴弾 4 本が入る袋などの生産に入った。繁忙期には作業が深夜に及ぶことも多かったが、みな意気軒高であった。この年のメーデーには日本人と中国人の労働模範が選ばれ、全市の大会で表彰もされた。

私たち日本人労働者の身分は、安東時代には普通の賃金労働者であったが、安東から撤退したのちは軍籍の労働者になり、衣食住が保証されたうえに月々若干の小遣いを支給される「供給制」となった。銅山時代からは、起床ラッパで飛び起き、朝の点呼、駆け足、朝食に始まり、消灯に至るまですべて軍隊並みだった。それが輯安まで来ると一段と正規化した。例えば、夕食後には講堂に集まって工場長や指導員らの戦局報告がよくおこなわれ、革命歌の歌唱指導もあって戦意高揚がはかられた。「八路軍軍歌」、「解放区の明るい空」、「白菜の芯を食べよう」（当時の国民党軍の虎の子部隊を甘い白菜の芯に例えた歌）などの歌をみんなが集合した場において掛け合いで、競って歌いおおいに盛り上がったものだった。

また当時、輯安の街でよくおこなわれたことは、土地改革と満州国時代の権力者の清算だった。三角帽子をかぶせられた地主らを貧しい農民らが糾弾し、闘争する場面には直接遭遇しなかったが、街の空気が日一日と変わるのを感じた。そして、解放された農民らが銅鑼や太鼓で胸に大きな花をつけた息子や夫を民主聯軍に送り出して行った。こうして共産党を匪賊のように聞かされていた広範な農民や商売人などの態度が根本から変わっていった。時折、国民党軍の捕虜の一隊が街を通ることがあったが、農民らはそれをさげすみの目で見るように変わるのが私たちにも分かった。そうしたことも私たちの生産意欲を高めた。

他方、輯安では民主聯軍の兵器廠に働く日本人労働者との交流もあった。日本人の民族幹事が「中国の解放は日本の民主化を励ます」といった講演をしに来たり、春節には兵器廠に招待されて昼食をともにしたり、観劇もした。私にとっては中国の今日と日本の将来とのつながりを理解する一助になった。

輯安ではまた、日曜日には湖に行ってフナやナマズの釣り、谷川での水浴などにも行って骨休めもした。古代の朝鮮王朝・高句麗の古墳見学もあり、中国人労働者と一緒に文芸交流会もあった。食事の方は、普通は「大餅子」や「窩々頭」（いずれもトウモロコシの粉でつくったもの）だったが、日本人のいることに配慮してか、毎週 1 回コメの飯と糯コウリャンの飯が食べられた。正月には小麦粉が 1 人 1 斤ずつ配られ、みんなで餃子を包んでいくつ食べたか競争するなど楽しい思い出が残った。

こうした明るい空気を醸し出したのは、何よりも自分たちの生産した軍服などが前線の兵士の戦斗を支えているという達成感であったであろう。同時に、生活面で日本人の生活習慣に最大限の配慮がされたことだった。独身の男女はそれぞれ棟割り長屋が寮とされたが、家族持ちには長屋を四畳半ごと仕切って個室があてがわれた。風呂はなかったが、1 カ月に 1 度くらいは城内の銭湯に行くこともできた。

６．ハルビン時代

1948 年に入ると東北地域での共産党軍と国民党軍の内戦は、東北人民解放軍（民主聯軍が改称）の大反撃が勝利の段階に入り、長春と瀋陽といった大都市での決戦が近づいていた。わが被服工場もこの情勢に対応できるよう同年夏、北部の主要都市ハルビンに移動することになった。８月下旬、軍籍の労働者（日本人が主体、一部中国人を含む）全員がミシンほか機材を列車に積んで輯安駅を出発した。通化から梅河口、吉林をへて 9 月中旬ごろ浜江駅（ハルビン）に到着した。まだ長春が解放されていなかったため、途中、国民党軍機に襲われ、列車を切り離したり草木で擬装したり、人間はトウモロコシ畑に隠れたりで 1 週間ほどかかった。

浜江駅にはソ連製の真新しいトラック 5 台が横付けされ、それに乗り込んで仮宿舎に入った。まだ少年だったからか、ソ連製のトラックと聞いてわくわくしたことを覚えている。しばらくしていよいよ被服廠建設予定地の南崗区大直街の旧日本軍兵舎の跡地に入った。そこは広大な敷地を擁し、雑木林を通り抜けると、高いコンクリ塀に囲まれたロシア風の天井の高いどでかい建物が 7，8 棟カギ型に並んでおり、練兵場らしき広場が真ん中にあった。

どの棟も荒らされて中はがらんどう、石やセメントのかけら、板切れなど廃材が散乱していたので、それらの片付けから始め、床や天井を張り、電気を引いて動力ミシン場、裁断場、仕上げ場、梱包場、ミシン修理部などをつぎつぎに設営していった。そして 1 カ月後ぐらいには被服の生産が開始された。塀の外の林の中には食堂、炊事場、医務室などの建物が点在して、一大工場に整備された。また、工場の名称も「東北人民解放軍後方勤務部総被服廠」となり、チチハル、牡丹江、チャムスなどの被服廠から日本人労働者 50 人余りが集結してきた。一部現地採用の中国人労働者もいたが、総勢 150 人余りの日本人が生産の主体となった。中国の第三次国内革命戦争の運命を決する遼瀋戦役が迫っていたため、綿入れの軍服や外套などの生産でフル回転した。

1948 年晩秋に人民解放軍が遼瀋戦役に勝利し、東北全域が解放された。翌年の春節（旧正月）には 60 度のパイチュウ（白酒）が配られ、餃子づくりもことのほか盛り上がった。よく晴れたメーデーには全員が新しい夏服に着替えて、数十万が参加したハルビン駅近くの祝賀会場に集結し

た。

ハルビン駅からまっすぐ西に進んだところにハルビンのシンボル的寺院であるソフィア大教堂が建っていた。そこを右折して行けば大直街、ハルビン鉄路局や元のハルビン学院など官公庁や学校がならんでおり、さらに北に行ったところが被服廠だった。大教堂を左折すれば白系ロシア人経営のチュウリン（秋林）商会をはじめ商店や映画館が軒を連ねる繁華街だった。

労働者の娯楽といえば工場内では革命歌の練習や文芸交流会に向けた寸劇の練習であったが、ハルビンでは何年ぶりかに映画館に行って、ソ連映画やポーランド映画を観賞できるようになった。中国語の字幕付きで助かった。数年前の独ソ戦争を描いた『ベルリン陥落』などは迫力があり、歴史の一こまとして目に焼き付いたと記憶している。

私の中国語は、護衛の兵士や労働者との仕事や接触のなかで自然と身についたものだったが、歌の練習は歌詞にある単語を覚えるのに役立ったと思う。加えて週に 2 回ぐらい日本人が教えるラジオ無線の教室に通い、そこで中国語のニュースなどを聞けたことも良かった。オームの法則などここで習った弱電の知識は、はからずものちに鶴崗炭鉱で電気工をやったときにおおいに役立った。

7. 鶴崗炭鉱での労働

1949 年 7 月、ハルビンの被服廠の本部から日本人留用者の帰国の話があった。まずは、老人・子供・病弱者・家族の多い人を先に帰国させることになり、私たち母子も軍籍を解かれて、被服廠の一団計 45 人と共にハルビン市から列車で瀋陽市に向かった。瀋陽市には東北人民政府の日本人管理委員会があり、その最高責任者が李初梨氏であり、その下に趙安博氏[3]がいた。いずれも日本留学の経験者である。ところが、瀋陽に到着すると間もなくして、管理委員会から帰国の船便がなくなったので帰国させることができなくなったと言われた。当時私たちは騙された、帰国の夢を絶たれたと腹を立てたが、近年になって満州引き揚げ記録をひもとくと、実際にはこの年少数ながら引き揚げ船が大連に来たとなっているので、必ずしも騙されたのではなかったかも知れない。

さて、帰国できなくなった私たちは、もう一度中国で仕事の「再配分」を受けることになった。管理員会側が示した就職先には、病院、洋服仕立、炭鉱などの仕事があった。皆さんはそれぞれ希望する仕事を管理委員会に申請した。ただ、私達母子は専門技能を持たないために、管理委員会から示された再就職先は鶴崗炭鉱だった。炭鉱に行くべきかどうか、私達親子はずいぶんと迷った。被服廠の仲間の中にかつて北海道の炭鉱で働いていた人がおり、「絶対行くなよ。炭鉱なんて生きて帰れるかどうかもわからんぞ」と、何度も母にいったようだ。私も、「炭鉱なんて殺されに行くようなものだ」と、その人に脅された。しかし、私達にとって炭鉱以外に選択肢はなく、鶴崗炭鉱行きを決めるほかなかった。結果として、この選択は私の人生で新たな出発となった。

1949 年 9 月、17 歳の私は母と 2 人で列車に乗り込み、長春、ハルビンと先日南下したコースを今度は逆に北上し、北安、チャムスをへて 3 日 2 晩をかけてソ連との国境に近い鶴崗に着いた。鶴崗炭鉱には興山、東山、南山の三つの山があり、内戦期の東北地域では解放軍と解放区に石炭

を供給できる唯一の炭鉱であり、日本人労働者だけでも約 1300 人余りいると聞かされた。中国の炭層の厚みは 10～20 メートルはざらで、なかには 40～60 メートルに達するところもあるそうだ。鶴崗だけで採炭面積は 20～30 平方キロメートルあり、年間採炭量 700 万トンとして 140 年間余り採炭できるということだった。私が配属された南山でも、「石炭増産で前線を支援しよう」、「採炭、掘進の技術を高めて先進労働者に」などのスローガンが掲げられていた。

南山で働いている日本人労働者は 300 人余りであった。20 代の独身者が多く、当初は飯場の長屋のような寮で集団生活をしていたが、間もなく 3 階建てのビルに移った。妻帯者は日本でいう炭住に住んでいた。独身者の多くは元満蒙開拓青少年義勇軍の人達で、ほかに満蒙開拓団や一部の旧軍人がいると聞いた。そのうち大多数が 1946 年夏の引き揚げ予定であったのに、国共内戦の激化でそれが果たせず、しかもその経緯や事情について説明もないまま鶴崗に送り込まれた人々だったようだ。このため一部の反動分子が帰国させろと騒動を煽り、それとのたたかいが私の行く前年に決着したばかりだと聞いた。その闘争の指導者として先輩たちはよく「毛利さん」という人を口にした。あとで知ったことだが、この人は本名・大塚有章[4]という戦前の共産党員で、逮捕・投獄をへて満州映画協会（満映）に就職。戦後は長春で共産主義連盟を組織して活動し、鶴崗にはアクティブの「東北建設突撃隊」15 人を率いて乗り込んだという。私が鶴崗に行ったころは青年をはじめ多くの日本人労働者が「突撃隊」に入り、生産現場や生活、学習などでも先進的役割を果たしていた。私も彼らに引きつけられ、学びたいと思ってその一員になった。

私が配属されたのは南山第二坑の 142 切羽。この切羽では各番方 15 人ずつ、昼夜三つの番方でおよそ 50 人余りだった。切羽とは採炭現場のことで、中国では「掌子（ジャンズ）」と呼んでいた。全番方を指揮するのは大組長、各番方を統率するのは小組長。斜坑であったので、300 馬力の巻き揚げ機のワイヤーロープが高い櫓の大きな車輪に掛けられ、そのロープの先に炭車（トロッコ）約 15 両が直径 50 ミリの太いピンでつながれ、まず空車を坑内の各切羽の入口に降ろし、帰りは 1 台 800 キロの石炭を積んだ炭車 15 両を引き揚げてきて坑外の選炭場の方に流すという仕組みだった。南山二坑だけでも主坑道を降りていくと、ちょうど幹から枝葉が分かれるように左右に切羽がいくつもあるから炭車を上げ下げし、ピンを抜いたり刺したりする「どんこ」と呼ばれる仕事には休みはなく、敏捷で体力のある若者でなければとても務まるものではなかった。

坑内の作業は大きく掘進と採炭に分かれる。掘進は主坑道から枝葉のように分かれる掘進坑道を 2 人で掘り進み、切羽をつくっていく。切羽での採炭作業は先山と後山に二分されて、先山が電気ドリルで炭壁に穴を開けそれにハッパを詰めて点火・爆発させ、後山が崩れた石炭をスコップでチェーンコンベヤーなどに乗せて下の坑道に置かれたトロッコに 1 台ずつ積み込む。15 台が満車となれば切羽の入口まで坑道の傾斜を利用して走らせる、そして巻き揚げ機で引き揚げられるようにする。南山二坑の炭層は 8 メートルほどあり、まずは 2 メートルほどの炭壁の石炭を採掘する。そしてそこに生じる空洞部分を何十本もの坑木で支えるが、あとに残る約 6 メートルの炭層が自然崩落するのは必然なので、安全のため坑木で 2 メートル四方の井桁を組みボタなどを充填して一つの切羽に太い柱を何個も築いておく。それでも自然崩落がいつ起こるかは確定できないから、ドームのように空洞になった部分の炭を取り出そうとして死傷する事故も経験した。

戦前の満州炭鉱（株）経営時代には、中国人に乱掘･乱採をやらせ、天板にまでハッパをかける無謀なことを強いて、落盤による犠牲者は多数にのぼったと聞いた。

当時のヘルメットは柳で編んだ安全帽であり、落盤による衝撃には耐えられなかった。落盤事故では、一緒に働いていた仲間が 2 人亡くなった。また、数は少ないが、ハッパの事故もあった。南山にもその事故で両目を失明し、右手首を失った先輩で、川村さんという方がおられた[5]。私がその事情を聞いたところでは、この方は先山でハッパを装填し点火した数はしっかり記憶していた。この日もいつも通りみんなは切羽坑道に出てハッパが鳴り終わるまで、「1、2、3…」と数えていたのだが、どうしても一発鳴らない。導火線が湿っていたり信管に不具合があったりするので、その人が単身切羽の炭壁に向かったところで爆発した結果の惨事だった。この先輩はみんなから尊敬される人格者で、寮の青年達の良き理解者であり、教育者だった。私の母は毎日寮に行っては繕い物をしていたので、この先輩からいろいろと話を聞いて私に「あんな人にならなければ…」とよくいっていた。

これらの事故よりもっと恐ろしいのは、坑内労働者が「ばれる」と呼ぶ採炭現場全体の崩壊である。ミシミシという音が切羽全体で起こり、太い坑木がつぎつぎにへし折られ、井桁の支柱もぺちゃんこにつぶれゴーという轟音が響き渡る。そんなとき、ベテランの労働者が危険を顧みず、すばやくドリルやベルトコンベヤーなどを撤収し、ほかのものには切羽からの退去を指示する。私も一度それを経験して初めは生きた心地もしなかったが、沈着・冷静な先輩達の行動にただただ感服するばかりだった。

炭鉱では崩落のほかに有毒ガスの発生と水害がおおきな危険だ。戦中、日本の炭鉱主が中国人を牛馬のように使って保安設備を放置していたため、ガス爆発事故が多発したという。解放後も初めのうちはまだ事故もあったと聞いた。だが、私が採炭現場に入るようになったころは、地上の新鮮な空気を坑内の奥にまで届くような通風装置が整備されていた。それに専門の保安員が常時安全灯を提げて頻繁に各切羽を巡回するようになっており、安全灯の火が消えたら即座に作業停止を命令するようになっていた。ガス爆発事故は一度も起こらなかった。このほか、坑内には坑木に生えるキノコを食べ、水を飲んで生きているかわいいネズミがいるが、その姿が見えないようになると有毒ガス発生のシグナルだと聞いていたので、みんながとても大切に扱っていた。坑内では、主坑道と各切羽の入り口には電灯があったが、切羽では安全帽に取り付けたキャップランプが頼りであった。これは硫酸バッテリーによるランプであり、バッテリーは腰につけていたが、不注意で硫酸がもれてしまうと、ズボンがぼろぼろになってしまった。

健康を守るためとして、保健食制度というものがあった。1 日 3 食とは別に労働者の健康を守るために、労働日数に応じて毎日パン、ミルク、肉や魚の缶詰、ビスケットなどが無料支給された。作業中の切羽ではハッパをかける合間に保健パンにぱくつき、仕事から帰ればミルクをわかして菓子を食べるというものだった。

賃金がどう決まるかというと、まず鉱務局など指導機関が定めた標準にもとづいて、炭鉱労働組合が職場や番方ごとの討議を組織し、労働者相互の意見を聞いて指導機関が最終的に基本給を決めていた。それぞれの坑や切羽によって条件はいろいろだし、職種も異なるだけに賃金決定に

は慎重で細心の注意が払われ、大衆討議の内容がもっとも尊重された。このため賃金査定ではみな歯に衣を着せずに長所短所を出し合い、団結をより強め、生産意欲も高まり、出炭量も急速に伸びることとなった。また、基本給のうえに生産目標額を超えた分は能率給が支給されたし、ほかに増産奨励金や合理化提案を出した職場、1 カ月間に 1 人のけが人も出さなかった職場などに各種奨励金が支給されて、奨励金が基本給とほぼ同額かそれ以上になることさえあった。

1950 年、私たちの 142 切羽にはソ連製のコールカッターが導入された。このカッターはちょうどチェーンに歯がついた削岩機のような機械で、炭壁の底をさらって炭壁を緩くし、これにハッパをかければどさっと採炭できるというものだった。そのおかげで採炭量は急増し、この年 142 切羽は当時の東北地方の「英雄切羽」（労働模範集団）として表彰された。142 切羽の鉱夫は全員日本人であった。日本人労働者はほとんどが高等小学校まで行き 8 年間の教育を受けていたので、文字の読み書きもでき、機械操作の習得も早いということで、重宝されたようである。

鶴崗での宣伝・教育・文化活動はかなり多彩で充実していた。私は母とともに炭住で生活していた。仕事を終えて 30 分ぐらいかけて家に帰ると、まずは大福餅にぱくつき 3 個ぐらいをぺろり食べたあと、近くの共同風呂に駆け込んで炭塵にまみれた身体を洗うと、母親の準備した食事を済ます。それから一服して学習室に行き、中国や日本、世界の時事を報じた壁新聞を見るのが日課となっていた。1 週間に 1 度くらいは情勢の学習会があるので、それに向けて文献や資料を読み、自分の意見を準備していった。私がもっとも若かったため、先輩達が文献の読み方まで教えてくれたことを思い出す。こういう学習は被服廠にはなかったので大変ありがたかった。文化活動といえば、山ごとに日本と中国の労働歌や踊りのコンクールのようなものがあるほか、鶴崗全体の文芸交流会も 1 年に 1 度くらいはあり、『黄河大合唱』やソ連と日本の劇が上演された。歌や踊りが好きだった私の母は、劇の配役をもらい、歩いて 1 時間以上もかかるような東山まで出かけたものだった。

私にもっとも強烈な記憶として残っているのは、1950 年 6 月 25 日の朝鮮戦争勃発である。米軍が鴨緑江周辺に迫り、中国が「抗米援朝・保家衛国」（アメリカに抗して朝鮮を援助し、祖国と家を守る）を掲げて義勇軍を朝鮮に派遣してからは、毎日の話題はもっぱら戦争の推移であった。中国全土と同様、鶴崗でも朝鮮前線に派遣してくれという志願書が鉱務局や労働組合に提出され、幹部達はその説得に大わらわとなった。労働者はそのエネルギーを石炭の増産に向けていったが、1952 年初頭にアメリカが朝鮮と中国東北地方において国際法で禁じられている細菌を使ったことが報じられて、労働者の怒りを倍加させた。事実、私自身もある朝、三番方が明けて帰宅途中の道ばたで、雪の上に時季外れの蝿やゴギブリの固まりがうごめいている様子を目にした。仲間からも同じ情報が集中され、関係部門で調べたところ、これらの生物が細菌の媒介物であることが判明した。労働者のあいだでは、増産奨励金で兵器を買って朝鮮に送ろうという運動が起こり始めた。のちに知ったことだが、アメリカは旧日本軍の 731 細菌戦部隊の隊長・石井某を免罪して、そのノウハウを細菌戦に使ったといわれている。

私は肺浸潤を患って 1 年半後には坑内電気関係の仕事にかわり、中国人労働者と一緒に働くようになった。解放軍時代は一面では「国際友人」として扱われた私であったが、ここでは普通の

働く仲間として扱われた。しかもつい数年前までは日本人支配者から生き死にを無視された奴隷のように扱われていた中国人労働者であり、私に一抹の不安がなかったといえばウソになる。だが案ずるより産むが易しの例え通りだった。3000 ボルトを変圧するトランスがゴーンと音を立てている変圧室での作業、13 メートルの電柱での作業、重さ約 60 キロのトランスを天秤で担いで行く作業など初めての電気工としての仕事は、重圧と危険と知識が伴うものだった。彼らはそれを根気強く、手をとり足をとって教えてくれ、差別とか侮蔑とかを感じさせることはなかった。

8. 瀋陽の民主新聞社

1952 年末、日本人労組の方から話があって私たち親子は、瀋陽の『民主新聞』に勤務することとなった。この新聞は戦後早い時期に在中国日本人のために発行された邦字紙で、新聞のほか子供新聞、『学習の友』、文芸誌の『前進』を定期に刊行、理論書、小説などの発行や日本で出されている図書の取り次ぎなど在華日本人の出版関係を一手に引き受けていた。また、当時の瀋陽には医師や看護師、技術者、軍関係の労働者などいろいろな職場に日本人がおり、学習会や講演会がよく開かれていた。その軸になったのも、民主新聞社の社員だった。

私は読者通信係に着いたが、新聞社の仕事など生まれて初めてでおおいにとまどったことはいうまでもない。当時の社長は井上林氏[6]、編集長は池田亮一（本名は三村亮一）氏[7]、デスクに森藤悟氏（元は鶴崗炭鉱日本人労働組合の議長）、出版関係の責任者に菅沼不二男氏[8]がおられ、社員の皆さんの援助でなんとか仕事をこなすことができた。

私が民主新聞社に入社する直前の 1952 年末に、在中国日本人の帰国に関する協定について、中国紅十字会と日本赤十字社、日中友好協会、平和委員会の 3 団体と話し合うとの声明が出された。それまでさまざまな持ち場で中国革命や新中国建設に協力してきた日本人にとって、それはまたとないビッグニュースであった。程度の差こそあれみんな躍り上がって喜んだことはいうまでもない。それと同時に、帰国実現の見通しを持てるようになったことから、どこの職場や機関でも日本人の働いているところではどこも日本問題の学習熱が急激に高まり始めた。民主新聞社が主催する青年学習会にしても、こんな人がと思う人達まで市内の遠くからバスや電車でやってくるようになった。私もこの学習会に参加し、日本問題についての文献や日本情勢の討議のほかに、日本の社会的な風潮が戦後どのようになっているのか、生活や人々の考え方はどんなふうかといった問題についても、資料を作って配ったり、報告したりすることに重点をおいた学習会を頻繁に開くことになった。

1953 年春、帰国が現実になると、学習会に熱も入るが同時に日本への誤った見方も少なからず出てきた。例えば「日本の労働者は苦しい生活をしていると聞いてきたが、メーデーの写真など見るとみんなぱりっとした背広姿で苦しさなど感じられない」とか、極端なのは「わしらを日本に帰したくないから、日本の生活は苦しいというのだろう」という意見まで飛び出す始末だった。しょせんこうしたことは日本に帰ってから、本当に分かることではあるが、やはり一定の理解を持っておかないと帰ってから一挙に失望したり、崩れたりすることになりかねないとの心配があった。日本の生活の壁にぶつかってたちどころに崩れたといわれるシベリア帰りの人達を教訓に

しようと、私たちのあいだでは話し合っていた。

９．北京の労農速成中学

瀋陽の民主新聞社では半年ほど仕事をし、1953 年半ばには北京に移った。そして 57 年、中国の関係機関の配慮で北京の労農速成中学に入学した。中学・高校の教養過程を２年間でクリアしようという特殊な学校である。この学校は抗日戦争や解放戦争の時期に八路軍や解放軍に参加し、中学･高校などの勉強の機会がなかった中堅幹部の人達を対象にしていた。そして教育レベルを向上させて、国の政治･経済など各戦線の任務をより良く指導できるようにすることを目的としていた。私も日本の敗戦で勉学の機会を失い、民主聯軍の軍籍労働者、炭鉱労働者を務めてはきたが、これから日本に帰って社会に役立つ人間になるには中国の大学で学ばなければならない、そのためには中学･高校レベルの教養をある程度学んでおかないといけないのではないかと勧められたわけである。私はその好意を受けるつもりだったが、大学までとなれば７年間、母は 60 歳に迫る高齢となるのでどうだろうか。母はそうなれば、大学の日本人教師の家に住み込みのお手伝いさんとなる予定だったので、気苦労もあろうかと思って聞いてみると、「おまえが良ければそうしなさい」といってくれた。

学校では、国語、歴史、数学が主体で外国語や体育はなかった。生徒はみな私より 10 歳から 20 歳は上の幹部で、みな弾の雨をくぐってきた人達だった。夜の自習時間が終わって就寝するまでの自由時間に大変有意義な話を聞くことができた。貧乏な生活を変えねばと思って革命部隊に参加し、自分たちの手で人民が主人公の新中国をかちとったことの喜びがなんのてらいもなく語られた。1957 年には共産党が「整風」（誤った思想・行動をただす）運動を提唱したことを機に、社会の一部に社会主義を嫌い共産党を攻撃する潮流が生まれたが、学内ではそれを批判する壁新聞が張り出された。夜の話題はもっぱらその「反右派闘争」の背景とか要因についてであった。国内でいえば解放されてわずか８年、何千年の旧社会が生み出した思想、習慣、風俗の残りかすとのたたかいは続くということ。国際的にはソ連のスターリン批判がもたらした社会主義国内の動揺に働きかけた欧米列強などの動きがあることなどについて、ポーランドやハンガリーを例に大いに語りあわれた。

1958 年には「多く、早く、立派に、無駄なく」社会主義を建設するという総路線がうち出された。校内に炉を築き、製鉄がおこなわれたが、合格品を出せるわけではなく、この運動は「鉄よりも人間の思想を鍛えるのだ。西洋崇拝思想をなくすのだ」といわれ、納得した記憶がある。

また同年秋には、「四害を除く」運動が大々的にとりくまれた。四害とは雀、ネズミ、蝿、蚊を指しているが、要するに農作物に危害を加えたり、伝染病を媒介するものを根絶することだった。これは朝鮮戦争でアメリカが実施したとされる細菌戦を契機に始まった愛国衛生運動の一環でもあった。学生全員が休み時間には手に手に蝿叩きをもって校内外をめぐり、殺した蝿を夕刻に班長に提出、戦果は何十匹と黒板に掲示される。蚊退治の方は、朝起床すると、洗面器に石けん水を塗って共同トイレなど蚊の多いところで振り回す。そして班長のところで１匹ずつ数えてやはり黒板に戦果を書き出した。同級生のおじさん、おばさんがそれをまじめ顔でやるのがなんとも

ほほえましかった。

雀退治の作戦はもっと大がかりだった。学校は 2 日間休んで、全員がバケツや銅鑼などを持って屋根の上や樹木の枝に乗り、雀の一群が舞い降りようとすればガンガン叩いて止まらせない。それが北京市政府の呼びかけで 2 日間にわたって全市で実施されたため、多くの雀が息が切れ、血を吐いて落下し、一時期雀の群れが見られないようになった。まさしく大衆運動の威力であった。

10. 中国人民大学の時代

1959 年 9 月、中国人民大学の政治経済学部に入学した。この大学は延安に源流を持つ華北大学が前身であり、この年も学生の半数は「在職幹部」といわれる企業や政府機関などで職に就いている人、あと半数が高校卒だった。教科は政経学部の場合、当時はまだソ連の経済学教科書をテキストに使っていたが、中心はマルクスの『資本論』の解読だった。ほかの教科は中国共産党の歴史、国際共産主義運動の歴史、マルクス･レーニン主義の基礎などで、第一外語はロシア語だった。

学習の要諦は理論と実際を結びつけて運用できることであり、一つの問題でも良いから解釈ではなく実際に解決できるようになることだった。一例を挙げれば、入学の翌年 1960 年 4 月には中国共産党が「レーニン主義万歳」ほか二篇の論文を発表した。それは 63 年からの中ソ公開論争

1964 年ごろ山西省の農村を訪問したときの記念撮影
前列左端が国谷（当時 32 歳）、右から 3 番目が母（当時 57 歳）である。

のはしりというべき重要文献で、大学では一般授業を 3 週間ストップし、これら文献の学習・討議にあてた。その内容も例えば「暴力革命は普遍的法則」という原理について、それを覚えるのではなく、学生一人一人の思想に立ち入って学びあうものだった。

また、当時ソ連共産党指導部が中国による修正主義批判に腹を立て、1960 年夏には中国の経済建設を援助していたソ連技術者の一斉引き揚げや原子力協定の破棄など、イデオロギー問題を国家間の問題とし中国の建設を直接破壊する背信的行為に出た。こうして 63 年からはマルクス主義の根本原則をめぐる中ソ公開論争が始まった。学内ではラウドスピーカーでインターナショナルが流れ、『人民日報』に載ったソ連批判論文が放送されると、みなその場に立ちどまって静聴し、教室ではその日の論文をめぐって論議がおこなわれた。当時の学生達の心意気は、当時いわれていた「世界でまだ苦難の中にある 3 分の 2 の人民が解放されるまで、世界革命を続けるのだ」という誇り高いもので、中国人民は世界の中心にいるのだという矜持を感じさせた。

1966 年に始まったプロレタリア文化大革命というものについて、私は中国をソ連のように変質させないための革命と受け止めていた。その気持ちを確かめるため、帰国前段に 1 カ月間母とともに中国各地を見学させて頂いた。そして 67 年 11 月に上海から中国の貨客船「紅旗号」に乗船し、母とともに門司港に着いた。私自身 30 年ぶり、母は 35 年ぶりの帰国だった。

私はもとより母も中国のその後に気をかけていた。母は、田舎の我が家に毛沢東の肖像画を掲げ、人々に中国はこんなにかわったのよと話しかけ、「おばさんは弁護士さんみたいだね」といわれていたという。私も下関に来て日中友好・国交回復運動などに専念してきた。中国指導部は今日、文化大革命の眼目としていた「資本主義の復活はゆるさない」という目的をねじ曲げた。そして、「先に富めるものから富む」といって「社会主義の市場経済」、実は資本主義の道を進め、今や貧富の格差が際限なく拡大し、官僚の腐敗も目に余るものとなった。しかし、中国革命の勝利を実体験した私は、私利私欲ではなく幾千万の勤労大衆の利益に奉仕するという思想にみちびかれるならば、今後どんな曲折があろうと、必らずや歴史は進歩発展し、抑圧も搾取もない大同の世界が実現できるものと確信しています。

私のささやかな中国留用体験を書かせて下さった諸先生に感謝するものです。

---

[1] 満蒙同胞援護会編『満蒙終戦史』（河出書房新社、1962 年）464 頁。なお、1940 年 10 月当時、安東市の人口は、中国人 20 万 2737 人、日本人 2 万 4030 人、朝鮮人 1 万 9328 人、総計 24 万 6129 人であった（満洲国国務院総務庁統計処・国務院治安部警務司『満洲帝国現住人口統計（康徳 7 年 10 月 1 日現在）』JACAR アジア歴史資料センター、Ref.A06033530500、第 122 画像目）。

[2] この女性は藤田一恵氏であり、同氏は電気工の夫・功氏とともに被服廠に留用されていた（朱福来「被服工場の日本人のまとめ役―藤田功氏」中国中日関係史学会編・武吉次朗訳『続新中国に貢献した日本人たち』日本僑報社、2005 年）。

[3] 趙安博については、水谷尚子『「反日」以前　中国対日工作者たちの回想』（文藝春秋、2006 年）が詳しい。

[4] その自伝が、大塚有章『新版未完の旅路』第 1～6 巻（三一書房、1976 年）であり、また紹介

文として劉遅・劉延州「中国の古い友人―大塚有章氏」（中国中日関係史学会編・武吉次朗訳『新中国に貢献した日本人たち』日本僑報社、2003 年）がある。

[5] この方は川村静夫さんであり、古川万太郎『中国残留日本兵の記録』（岩波書店、1994 年）、NHK「留用された日本人」取材班『「留用」された日本人　私たちは中国建国を支えた』（NHK 出版、2003 年）でも紹介されている。

[6] 経歴は、丁民・朱福来「『民主新聞』と井上林氏」（前掲『新中国に貢献した日本人たち』）参照。

[7] 経歴は、劉徳有「『人民中国』誌に刻まれた事績―池田亮一氏」（前掲『続新中国に貢献した日本人たち』）参照。

[8] 経歴は、劉徳有「わが人生に悔いなし―菅沼不二男氏」（同上書）参照。

※本回想記は、下関市在住の国谷哲資氏が、ご自身の戦後中国での留用体験をまとめたものである。飯塚靖（下関市立大学経済学部）と張龍龍（当時下関市立大学大学院修士課程院生、現早稲田大学大学院博士課程院生）は、同氏より合計 4 回（2014 年 11 月 27 日、12 月 5 日、2015 年 2 月 23 日、3 月 24 日）にわたって聞き取り調査を実施した。その結果、氏の証言は、中国東北部における戦後日本人留用者の実態を知るうえで貴重な内容であることが確認できた。特に、中国共産党の支配下にあった共産党軍被服廠と鶴崗炭鉱に関する証言は、関連する資料が極めて少ない中で、重要な証言であった。そこで、国谷氏に今回の聞き取り調査の内容も踏まえて、被服廠と鶴崗炭鉱時代を中心にして、回想記を執筆いただくよう依頼した。なお、鶴崗炭鉱を離れて以降の体験については、時間の都合で十分な聞き取りができなかった。そのために、この部分は国谷氏に比較的自由に執筆していただいた。こうしてまとめられたものが本回想記である。本稿は、わずか 13 歳で母子二人中国に取り残された著者が、残留日本人や中国の人々との交流の中でいかに成長したかが克明に記されており、個人の成長記録としても興味深い内容となっている。なお、注は飯塚が記載したものである。

今回、国谷氏より、被服廠時代の職場の先輩である太田則平氏の手記をご提供いただいた。これも被服廠での留用の実態を知る貴重な資料であるため、一部を抜粋して掲載することにした。合わせてお読みいただきたい。なお、太田氏の手記の太字部分は、飯塚が書き加えたものである。また、原文の誤記などを多少修正し、読みやすい内容とした。　（飯塚　靖）

※太田氏の手記は 1987 年に私家版として公刊されていますが、本人ご逝去後の著作権者を探すことができませんでした。著作権者ご本人もしくは、著作権者をご存じの方がいらっしゃいましたら、大変お手数ではありますが、巻末に記載しました本誌編集までご連絡下さい。

（『拓蹊』編集：広島中国近代史研究会）